

二〇二二年度 高校 帰国生 入学試験問題

国 語 (60分)

△注 意▽

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから5ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙①および②の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙①および②の定められたところに記入しなさい。

受 験 番 号			



## I

以下の設問に答えなさい。

【問1】 次の①～⑮について、――部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。また、⑯～⑳について、――部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- |   |             |           |   |          |         |
|---|-------------|-----------|---|----------|---------|
| ① | ドシヤ         | 災害から身を守る。 | ⑪ | 人生のキロ    | に立つ。    |
| ② | 業務にシシヨウ     | をきたす。     | ⑫ | 日本の将来をウレ | える。     |
| ③ | 木々をバツサイ     | する。       | ⑬ | 包丁をトク    | 。       |
| ④ | 販売をソクシン     | する。       | ⑭ | 危険がトモナ   | う。      |
| ⑤ | メンエキ        | を高める。     | ⑮ | ホガ       | らかな笑顔。  |
| ⑥ | 安全確認のためジヨコウ | する。       | ⑯ | 誰の仕業     | かわからない。 |
| ⑦ | カイコン        | の涙を流す。    | ⑰ | 個性が埋没    | する。     |
| ⑧ | 気分がコウヨウ     | する。       | ⑱ | 海外に赴任    | する。     |
| ⑨ | 図書館で本をエツラン  | する。       | ⑳ | 高価な反物    | を購入する。  |
| ⑩ | 保護者のシヨウダク   | を得る。      |   | 肩からかばん   | を提げる。   |

【問2】 次の①～⑤の慣用句について、に当てはまる語を（ア）～（カ）の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

また、その意味として適当なものを（キ）～（シ）の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

慣用句		語		意味	
①	<input type="text"/> を噛む	（ア）	泡	（キ）	後悔すること。
②	<input type="text"/> が置けない	（イ）	気	（ク）	油断できないこと。
③	<input type="text"/> のつぶて	（ウ）	柿	（ケ）	返事が全くないこと。
④	<input type="text"/> もない	（エ）	ほぞ	（コ）	遠慮する必要がないこと。
⑤	<input type="text"/> を食う	（オ）	にべ	（サ）	とてもおどろき、あわてること。
		（カ）	なし	（シ）	あいそがないこと。そっけないこと。

## II

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

昭和期の大日本帝国やナチスドイツは、自国民が「言論の自由」や「学問の自由」を持つことを許さず、国家の指導部が正しい見なした言論や学問だけを、国民に許す方針をとりました。その結果、国全体が間違った方向へと少しずつ進み始めても、それを軌道修正する動きがほとんど生じず、そのまま破滅へと直進していきました。

軌道修正する動きというのは、例えば普通の市民が「我々の国は道を外れているのではないか」という疑問を口にしたり、学者が専門的見地から「このままいまの針路をとれば、やがて国は危機的な事態に陥る可能性がある」と警鐘を鳴らしたりする行為です。

一九三七年七月に日中戦争が始まると、近衛首相は当時の政界と財界、そして大手メディア（新聞各紙と通信社、NHKラジオ）の幹部を首相官邸に招いて「懇談会」を開き、中国への武力行使という政府の方針に協力するよう要請しました。これを受けて、新聞もNHKラジオも通信社も「報道の自由」を自ら捨てて、政府の発表をそのまま無批判に報じたり、政府にとって都合の悪い事実を報じずに済ませたりするようになりました。

しかし、日中戦争が勃発してから数カ月の間は、首相の懇談会に幹部が招かれなかった雑誌の一部に、政府と軍の方針に疑問を差し挟む内容の記事が掲載されました。

例えば、論壇誌の一つ「文藝春秋」一九三七年一〇月号では、評論家の杉山平助が「戦争とヂャーナリズム（ジャーナリズム）」という記事で、戦時においてジャーナリズムが担うべき役割と「批評の自由」が必要な理由について、率直に意見を表明していました。

「現実においては、指導者の判断力のみが、常に絶対には保証されがたい。（中略）指導者側に、重大な誤謬が犯された時に、ジャーナリズムはこれを批判すべき義務がある。それは国家の大局から見ての義務である。

しかるに、ジャーナリズムの批評の自由を極端に拘束せられると、誤謬ごびやうは誤謬のままに進行して、重大な結果を招かないとも限らない」

その後、日本がどんな方向へと進んだかは、皆さんご存じの通りです。一九四一年一二月に、日中戦争が太平洋戦争へと拡大した後も、日本には「報道や批評の自由」が事実上ありませんでしたが、それは政府にとっても国民にとっても大きなマイナスでした。

この歴史が示すように、「自由」とは集団全体の利益に反するものではなく、むしろ長期的に見れば、集団全体の安全と安定性を保つために必要なブレーキやバランスの役割を果たすこともある、重要な「力」です。

ところが、日本ではそうした「力」の認識がこの一〇年で以前よりもさらに軽視され、「言論の自由」や「学問の自由」が少しずつ失われていく状況にも、さほどの危機感を抱かない国民が多数派であるように見えます。

学校で、「自由」の価値やすばらしさ、おかしいと思った時に自分一人であっても「おかしい」と口にする勇気を教える教育をしてこなかったツケが、長い時間をかけて大量に積み重なった結果、「自由」よりも「秩序」を当たり前のように優先順位の上位に置く社会が、強固な形で構築されてしまったようです。

集団全体の「秩序」を優先する思考とは、集団の上位者である政府や上司の言うことに逆らわず、ひたすら従うことを良しとする考え方です。上位者の判断に異を唱えたり、間違いを指摘する行為は、集団全体の「秩序」を乱す悪事と見なされるからです。

社会を見渡してみれば、そのような光景が、あちこちで生じていることがわかれると思います。「自由」よりも「秩序」を優先順位の上位に置く流れが加速すると、もう誰にもその流れを止めることはできなくなります。かつての日本がそうであったように。

そんな流れを止められるのは、まだ流れの勢いが弱いうちだけです。

また、「自由」を軽視する社会とは、そこに生きる人や生き方の「多様性」をも軽視する、あるいは認めない社会を意味します。

いろんなタイプの人が、いろんな生き方を選択できる社会を目指すというのが、いまの世界の趨勢すうせいであるように思いますが、社会や文化に関わる性別（ジェンダー）の問題も含め、日本の社会は「多様性」に不寛容で、それを認めれば「家族の絆きずな」などの「秩序」

が乱れるという主張もよく見かけます。

失ってからその価値に気づかされるものは、世の中に数多く存在しますが、その中でも特に重要なのは「自由」です。いまを生きる我々は、八〇年前の日本人が知らなかった、国民が「自由」を手放す道の行き着いた先を知っています。

守るべきは「自由」。その行為は、人の生活や人の命を守ることでもあるのです。

【問1】 この文章を一〇〇字程度で要約しなさい。

【問2】 この文章を読んであなたが考えたことを、四〇〇字程度で書きなさい。

【出典】 山崎雅弘「守るべきは自由」(集英社新書編集部編『自由』の危機——息苦しさの正体』集英社新書、二〇二二年六月、二七九〜二八三ページ)

